

(4) アフロブラジリアン宗教の場合

クララは会計事務所で働く 34 歳の女性で、生長の家では講師として集会を取り仕切る。

10 年前、仕事に行く途中で交通事故にあい、左の大腿骨を骨折しました。それ以来、ベッド生活が長引き、松葉杖なしでは生活できない状況になりました。ある日、母の友人が雑誌『Ascendedor』（現在の『Fonete de Luz』）を勧めてくれました。もともとポジティブシンキングやニューエイジの本が好きでしたから、雑誌が気に入りました。記事で印象深かったのは、ある若い女性の経験談でした。彼女は足の骨にひびが入ったのですが、それは自分自身の両親にたいして思いやりが不足していたことが理由だと書いてあったのです。その話は私の状況と合致しました。私は両親としょっちゅう喧嘩をしていました。生長の家の教化部に行きオリエンテーションを受けると、交通事故というのは第三者との心のぶつかり合いが原因だと聞きました。私は両親とぶつかっていたのです。それから後、教化部で錬成会があり浄心行が行われました。浄心行では先祖と両親への感謝の心を培うことを練習し実践します。生長の家の集会に参加して、足の調子もだいぶ良くなっていきました。その後、松葉杖を外すことができたのです。生長の家がポジティブな力を与えてくれたおかげだと思います。生長の家では自分には能力が備わっていると信じるようにと説いています。生長の家に来ていなければずっと松葉杖に頼る生活だったと思います。

彼女は、生長の家を知る前からカルデシズムやカトリック神父ラウロ・トレビザンなどの本を好んで読んできたという。すでに記したように (Vol.15 No.2)、ブラジルでは心霊主義のカルデシズムやラウロ・トレビザンの著作をニューエイジの潮流の一つにみならず傾向があり、彼女は生長の家もそのようなものとして受け止めたのである。彼女はカトリックとアフロブラジリアン宗教のウンバンダを実践する両親に育てられ、子供の頃からカトリック聖人にプロメッサすることが多かったという。また、15 歳の頃からイニシエーションを受け、ウンバンダで霊媒の役割を果たしてきた。このように彼女の宗教遍歴は混淆している。

生長の家で活動を始めるようになってから、彼女はウンバンダから離れるようになった。その経緯は次の通りである。

私にはいろんなエンチダージ（霊、神格）が降りてきていました。カボクロ、オリシャ、ボンバジーラなどいろいろなレベルの霊です。私は、カヴァーロ（ポルトガル語で馬を意味し、霊媒師を指す）として多くの人に助言を与えてきました。私が生長の家を知った時にはまだウンバンダのセンターに通っていました。私は講師に生長の家はウンバンダのことをどのように見ているのかと聞いてみました。そうすると、あらゆる宗教は一つに繋がっているのだから、今の自分の宗教を続けたいという答えが返ってきました。それでも私は生長の家の集会への参加を続けました。集会に参加する回数が増えるに連れ、私は憑依されなくても人の手助けができるようになるようになりました。それ

に、霊にたいして鶏の血やお酒などをお供えする必要はないと思うようになっていったのです。そして、今まで私に憑依していた諸霊に感謝するようにしました。生長の家は、あらゆるものに感謝するように教えているからです。そうするとだんだん私の心の中で生長の家が大きな部分を占めるようになってきました。でも、エンチダージが私に罰を与えるのではないかと考えました。霊媒師が「仕事」をやめるとエンチダージが罰を与えると聞かされていたからです。それで私はそれぞれのエンチダージのために 7 回ずつ生長の家の聖經『甘露の法雨』を読むことにしたのです。それから後はそれらの霊が私に憑依することはなくなりました。

彼女が生長の家に関心を持つようになったのは、ウンバンダと生長の家の病氣観や救済観の違いにあるが、憑依されなくても人の手助けができることに大きな関心を持ったようである。これは前回紹介したペドロが「内から外に向かう」成長という理解に通じている。

さて、ウンバンダはアフロブラジリアン宗教、先住民の宗教、そしてカルデシズムの教えが混淆した宗教だが、彼女の次の語りのようにその教義にはカルデシズムの影響が色濃く残っている。

私は 2 年間松葉杖を使いました。ウンバンダでは私の足は良くなりませんでした。「お婆さん (vovó)」と呼ばれる奴隷のエンチダージがいます。そのエンチダージは人の苦しみを肩代わりしてくれるんです。でも、「お婆さん」には、人にはそれぞれ通らなければならない人生があるのだから私の足の苦しみを肩代わりすることはできないと言われました。カルデシズムでいうカルマの考え方です。エスピリティズモ（カルデシズムとウンバンダ）では、それは担がなければならない人生の重荷だと説いています。生長の家では、それを打ち捨ててしまうことができると説きます。人生の終わりまでその重荷を担ぐ必要はないということです。また、生長の家では問題が起こった理由はどこにあるのかを説明しますが、ウンバンダでははっきりしません。だから、ウンバンダでは自分自身の運命を変えることができるということも知らないままで終わってしまうのです。たとえば、頭が痛いといいます。ウンバンダではエンチダージがその人に怒りを感じているからそのようなことが現れているので、彼にお供えをすればいいと言ったことがあります。つまり、ウンバンダでは人間が諸霊に支配されるのです。しかし、生長の家では人間が自分の人生を支配することができると思います。

ここにはペドロと同様にカルマからの解放が語られており、ウンバンダとカルデシズムの共通性が見て取れる。また、彼が語ったような階層化された霊界観への抵抗と平等主義への志向もみられる。そして、他者（諸霊）に頼ることなく、そして誰にも支配されることもなく、自律性を高めることで自らの運命を切り替えようとする信念が現れている。これは、「人間・神の子」という生長の家の教えによって、彼女が自分自身と「大いなる存在」との連続性を感得し得たことを物語っている。